

# 福音からの再出発

2010年—2015年  
6年間の刷新計画の手引

ローマ 2010年

# 目次

<b>福音からの再出発</b> .....	3
総長のプレゼンテーション .....	3
出発点としての福音 .....	4
福音の確かなあかし人.....	6
世界との対話のうちに .....	9
最後に.....	12
プロジェクト .....	15
2010年－2011年 .....	21
2012年－2013年 .....	29
2014年－2015年 .....	37
その他の補足的な刷新活動 .....	45
<b>略号</b> .....	49
<b>再評価と識別の期間</b> .....	51
プレゼンテーション .....	53
動機.....	54
方法論的なガイドライン .....	54
最終とりまとめの送付締め切り .....	59

## 福音からの再出発

総長のプレゼンテーション

親愛なる兄弟姉妹の皆さま、  
主が皆さまに平和をお与えくださいますように！

**創立の恵み**を祝い終えた今、私たち兄弟姉妹は、「小さき兄弟会」の創立800年祭までの恵みの期間に祝って来たことのすべてを継続するようにと招かれています。

2009年の総集会で選出された総理事会は、その最初の集まりから、**優先課題**を常に念頭に置きながら、**創立の恵み**のプロジェクトの一環として、次期6カ年間の兄弟たちの生活刷新のためのガイドラインを作ろうと考えてきました。その考察の成果が、これから皆さまに提供する文書、**福音からの再出発—2010年～2015年の6年間の刷新計画の手引き**です。

このプロジェクトは次の三つの段階を予定しています。1) 福音を生きる(2010年～11年)、2) 福音の賜物を「お返しする」<sup>1</sup>(2012年～2013年)、3) 私たちの生活と活動の場

---

<sup>1</sup> 「福音の賜物をお返しする」という文章は、2009年の総集会の総括文書「福音の賜物の使者」に照らして理解される必要がある：「本総集会のテーマは、福音化するミッションですが、それは、生活様式(Forma Vitae)としてフランシスコに与えられた福音の賜物を主にお返しする最適な手段です。私たちは「賜物」という言葉を、フラン

を立て直す（2014年～2015年）。いずれの段階も、次の原則を軸としています。すなわち、出発点としての福音、福音化するミッション、世界との対話、そして、私たちの組織の立て直しと刷新です。

## 出発点としての福音

このプロジェクトの出発点および中心は福音そのものです。だから、タイトルも**福音からの再出発**なのです。第二バチカン公会議以降、30年以上もの間、私たちの生活とミッションは、十分すぎるほどの分析の対象となってきました。歴史という列車に乗り遅れたくなければ、私たちは、当然のことながら、この分析を継続しなければなりません。私たちが生きている、この急速に絶えず変化する難しい試練の時期（「奉献生活」13）は、私たちに分析の継続を求めています。しかしながら、私たちを現状に導いた原因の分析や、既に過ぎ去って取り戻すことのできない過去の学術研究にのみ留まっていたはなりません。また、いまだ不確実な未来像を描こうとして、一連の戦略を練っても、それで十分とは言えません。こうした試みは、私たちの生活とミッションの深い刷新や立て直しが、単なる仕事であって、生き方ではないと考える方向に私たちを導くなら、どれもみな危険なものとなります。

---

シスコが「主は私に兄弟たちをお与えになりました」と言った時と同じ意味で使っています。そして、「お返しする」という言葉を、フランシスコが「私たちは、すべての善をいと高く至高の神なる主に返し、あらゆる善が主のものであることを認め、すべてのことについてあらゆる善の源である神に感謝しなければならない」と言った時と同じ意味で使っています。それゆえ、「お返しする」ということは、無所有となることを表しているのです。」（3）

ですから、未来のことを考え、**明晰さと大胆さ**をもって未来に備えることが必要なのは明らかです。未来のための戦略を考え、それを行動に移さなければならないことは、歴然としています。だからといって、キリストと人類への情熱を豊かに備えた現在の目標と力を失ったり、忘れたり、諦めたりしてはなりません。それゆえに、風邪や消耗によって生命を危険にさらしたくなければ、新しい火を熾し、新しい活力（樹液）を注ぎ込む必要があります。

この新しい火と新しい活力（樹液）は、私たちの生き方の根本的な中心である福音に立ち返ることによって、初めてもたらされます。イエス・キリストをより完全に真似ることを選ぶことばかりが私たちの生活ではありません。なぜなら、すべての洗礼を受けた者が「**キリストと同じ思い**」（フィリピ 2:5）を持つように求められているからです。また、ある福音的徳は、自分たちだけのものであると主張することでもありません。なぜなら、山上の垂訓（マタイ 5,1 以下参照）ですら、すべての人のためのものだからです。「福音の賜物は、私たち兄弟共同体の起源であります」（「BGG 6:福音の賜物の使者[2009年総集会総括文書 6]」）から、福音を、そのラディカルな要求をも含めて、私たちの日常生活の土台とし、私たちの行動の最初にして究極の基準とすることこそ、大切なことです。

他方、福音とは、その十全の意味においてイエス御自身のことです。つまり、福音を**会則および生活**として認めることは、単なる善意の表明ではなく、福音的な人間として生き、行動しようとすることなのです。福音的な人間とは、深い信仰体験によって強

められ、フランシスコが残してくれた生き方に従って、キリストを自分の生活とミッションの中心に置くことを知り、キリストを自分の存在の**すべて**とする人のことです。「**そればかりか、私の主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の“一切”を損失とみています。キリストのゆえに、私はすべてを失いました。**」（フィリピ 3:8 以下）それゆえ、私たちのように福音に従って生きることは、福音書の文言を単に守ることであつたり、行動のリストにしたりすることであつてはならないのです。むしろ、イエスのメッセージを全面的に心から受け入れ、イエスを私たちのすべての言動の根拠とするように導くものであるべきです（裁可会則 10, 8-10 参照）。

親愛なる兄弟姉妹の皆さま、私たちが意味のある存在となつて、私たちのカリスマを復興させるために、私たちには福音から再出発し、福音を自分の中に宿らせるという大事業が待ち受けています。この道を進むときのみ、将来は私たちに保証されます。聖霊が私たちをその将来に向けて動かしておられるからです（「奉獻生活」110 参照）。

### 福音の確かなあかし人

福音を自分の中に「宿らせる」というこの体験によって、私たちは、イエスの福音の確かなあかし人となることができます。そして、それこそが、この**福音からの再出発**というプロジェクトのすべてなのです。それは単に福音を宣べ伝えることではなく、むしろ、イエスをあかしする者となることです。創立当初の兄弟た

ちのように、私たちは自分が体験していることを告げ知らせるように招かれています (BGG 7 参照)。この旅路には次のような三つの段階があります。1) 福音を「良き知らせ」として**受け入れる**、2) 福音が、かつてフランシスコの生活を変えたように、私たちの生活を変えるまにさせる (BGG 5 参照)、3) 福音の賜物を、生活によるあかしと言葉による明確な告げ知らせを通してお返ししつつ、心を主に向け、兄弟性と小ささのうちに**世を巡る** (BGG 7, 10, 20 参照)。これらの段階のどれ一つも、なおざりにしてはなりません。

そのようなあかしをするには、深い神体験を必要とします。しかも、この確信は2009年の聖霊降臨後の総集会の指令の中で表明されています。それによると、福音化は「強力な神体験によって支えられる」ように要請されています(「総集会の指令」13)。「私は信じた。それで、私は語った」(2コリント 4:13)と聖パウロは言っています。「福音のダイナミズムを備えた生活は、神の国への抑えきれない欲求となっています」(BGG 28)。私たちは、御言葉に本当の意味で出会わずして、御言葉を告げ知らせることはできません。キリストとその福音に個人的に出会うことがなければ、福音化することはできないのです。宣教師であり、福音伝道者であるためには、パウロのようにキリストとその福音に触れ、それによって変えられ、奮い立たされる人間でなくてはなりません。

私たちは人々の兄弟姉妹なのですから、私たちのミッションは、現代の人々と交わりつつ、与えると同時に受ける態度で (BGG 15

参照)、福音の持つ絶えず新しいメッセージを私たちが生きているさまざまな状況に同化させつつ、福音をあかしし、**人々の間に在って (inter gentes)** お返しすることです。また、福音の教えを、私たちに耳を傾けてくれる全ての人々にもっとわかりやすいものにするために、私たちの言語を世界のコミュニケーション基準に合わせることに、想像力と創造性をもって (BGG 9, 10 参照)、**賜物の論理 (BGG 9)** からスタートして、さまざまな人々に出会うために、境界を越えることでもあります。

私たちは自分の国や出身地の文化の中でこのあかしを立てることがある一方で、他方、地の果てまで赴くようにと主の霊が私たちを駆り立てることもあります。「信仰の最初の瞬間をユニークな形で示している」(BGG 18 参照)のは、この**諸国の民への (ad gentes)** ミッション—**人々の間に在る (inter gentes)** ミッションの最高の形—です。このミッションこそは、創立の特徴への忠実さが関わることであるだけに (裁可会則 12 参照)、本会が諦めることのできないものです。しかし、これはみな、「いかなる福音宣教プロジェクトも、個人のイニシアチブによるものでもなければ、個人の所有でもない。福音化するのは常に兄弟共同体なのである」(BGG 27) ことを心に留めて、兄弟共同体の中でなされなければなりません。預言的な兄弟共同体、すなわち、しるしである兄弟共同体の創設は急務なのです (BGG 8 参照)。

私たちは、聖霊に従い、**人々の間に在る (inter gentes)** ミッションと**諸国の民への (ad gentes)** ミッションの特徴を組み合わせること、そして、**場所のしるし**を読み、この世にある小さい人々



の間に在る小さい者としての条件にまず合う場所から始めながら、  
なによりも**辺境の地に住んで、忘れ去られた、非人間的な修道院**  
に惹かれるままに行く (LgP 37 参照) ことを望むべきです。それ  
ゆえに、2009年の総集会の文書は、**自分自身を中心から外し、  
自己に言及するのをやめる**ように促しているのです (BGG 14 参照)。  
兄弟姉妹の皆さま、ダイナミックな福音化を麻痺させる恐れのある  
無感動や膠着状態 (BGG 12 参照) を克服して、私たちの天幕に  
場所を広く取る (イザヤ 54:2 参照) ことが絶対に必要です。

親愛なる兄弟姉妹の皆さま、これまで折に触れ、私たちは、自  
分の語ることと実際の生き方との間にずれがあることへの懸念を  
表明してまいりました。私たちは単純に事実を述べることで済ま  
せてはなりません。今こそ、兄弟性と小ささの深い信仰体験から、  
その現実に根ざして福音をあかしする時なのです。今こそ、動き  
始める時、文化的、地理的境界を越える時、世界中の小径を動き  
回る時、そして、自分の小教区や管区の枠を超え出る時なのです。  
世界は今、これまでにないほど、福音を必要としています。逃げ  
てはなりません。今こそスタートする時なのです。

## 世界との対話のうちに

「全世界に行って、福音を宣べ伝えなさい」(マルコ 16:15)。  
御父から遣わされたイエスは、御自分の弟子である私たちをも遣  
わされます。小さき兄弟たちのミッションの場は**人々の間 (inter  
gentes)**です。つまり、**街角や通り**であり、人々が出会い、生活  
し、働き、苦しみ、楽しむ場所であるということです。彼らが来

るのをただ待っていてはなりません。私たちのほうから出向いて行くことが必要です。困難を伴うかもしれませんが、自ら出向いて行って、人々に出会い、福音的な想像力と創造性をもって彼らに福音を宣べ伝えることが必要なのです。

この世界は私たちの修道院です。そのことをある種の誇りをもって繰り返したいと思います。しかし、この世界を**福音の賜物をお返しする**ためにふさわしい場とするためには、この世界を愛し、慈しみ、世界と対話し、「主がお与えくださる前代未聞の恵みのチャンスを発見しながら、私たちを取り巻く社会的背景や文化を肯定的に捉える術を学ぶ」(BGG 15) 必要があります。つまり、世俗的な文化を脅威とのみ捉えるべきではなく、むしろ、福音を告げ知らせるための新しい魅力的なチャンスとして、神学的かつ司牧的な挑戦として捉えるべきなのです。そうすれば、この世界は戦場ではあっても、善い種を蒔くのにふさわしい場となります。愛してもいけないものを福音化することはできません。だとしたら、世俗化を、福音の光で読み解かれるのを待っている時のしるしの一つと考えてはどうでしょうか。現代は、善き知らせを宣べ伝えるべく神が私たちに与えてくださった時なのです。小さき兄弟たちは、福音の解放の力を生き方と言葉で伝えることを諦めてはなりません。ネガティブな現実と危機の中にあっても、人々の夢をつかみ、彼らの生活の中にイエスが告げ知らせられ、実践された神の国に至る道を切り開くことは可能です。

この世界で宣教師（ミッシヨナリー）であるということは、分断された文化と対話することであり、自分の話す言語を見直すこ

とであり、辺境の地に行って、新しいアレオパゴスに対して心を開くことなのです。それこそは、私たちがよく言っている再構築（re-dimensioning）の深い意味に他なりません。それは単に、引き揚げたり閉めたりすることではありません。ただ、時には、こうした新しいアレオパゴスを受け入れるためには、閉めるしか方法がないこともあります。

## 私たちの生活と活動の場（在り方）を立て直し、刷新すること

このための全プロセスは、2006年の臨時総集会の総括文書が私たちに求めていることの枠内で行われます。すなわち、継続的な識別の過程を経ること（LSR 35 参照）、私たちのミッションを見直すこと、そして、私たちの在り方とあかしについての未知の道を敢えて取ること（LSR 33 参照）です。この識別と考察のプロセスから逃れられる管区も兄弟もありません。私たちが今どこにおり、これからどこに行こうとしているのか、聖霊は私たちをどこに導こうとしているのか、そして、私たちが行きたいのはどこなのかを識別するために、時間をかけることは大切です。これこそは、前回の総集会で定められた**再評価と識別の期間**に提案されていることです（2009年総集会の指令10、参照）。

現状を考えると、多くの場合、必要なことを識別することは、再構築（re-dimensioning）という辛いプロセスにつながります。つまり、より預言的な形で自分の存在意義を取り戻すために、復活の恵みの瞬間を生きることです（BG 31 参照）。しかし、その

ためには、**中からの再活性化**、すなわち、誓願によって約束した福音と生活様式への深い回心が必要です。そのようにして初めて、現状に適した組織を工夫することができ、それによって私たちは、創立時の精神への忠実さをもって、難題に挑み、現代の人々に問いかけ、充分納得できる形の使命（vocation）を彼らに提供することができるのです。

そのような要求に直面していても、フランシスコのカリスマが単に私たちのものではなく、教会のものであり、世界のものであるならば、そのカリスマは生き続けることができます。いくつかの管区（構成単位）を含め、多くの組織が消滅を余儀なくされるでしょうが、カリスマそれ自体を消滅させてはなりません。それどころか、カリスマを復興させなければなりません。それこそは、現代の私たちに課せられた務めであり、まさに再構築はそこに向かっているのです。

## 最後に

親愛なる兄弟姉妹の皆さま、私たちの前には、福音的な生活に再び火を灯すという大いなるチャンスと責任が待ち受けています。これはこの数年間共に体験してきた**創立の恵み**がもたらす最も素晴らしい実りとなり得るものです。私たちは自分自身の中に創立時の原動力を再び蘇らせるように求められているのですから、完全に福音に満たされるようにしましょう。そうすれば、福音化への働き（コミットメント）において自由で、刷新された、確かな御言葉の奉仕者となることができます。フランシスコの体験を引

き継ぐなら、今日でも私たちは心に福音を受け取り、感じ取ることができ、それは、常に私たちの歩みを照らす灯、道の光（詩篇 119:105）となることでしょう。このようにして、私たちの具体的な選択は、忠実に守ることを約束した福音の求めに応えるものとなるはずです。

親愛なる兄弟姉妹の皆さま、あなた方の総長でありしもべである私は、総理事会の兄弟たちと密接に連絡を取りつつ、神である愛のうちに（1ヨハネ 4:16 参照）あなた方にお願いします。私の言葉を寛大な心で受け入れ、総理事会として提案するこの2010年 - 2015年の刷新プロジェクトの中であなた方をお願いしているすべてのことを実行してくださるようにと。

「これらの御言葉を寛大な心で受け入れ、理解し、模範によって他の人々に伝え、最後まで堪え忍ぶ人は皆、父と子と聖霊とに祝福されるでしょう。アーメン」(全キリスト者への手紙 II:88)。

2010年2月2日 主の奉献の祝日に  
ローマにて

総長 兄弟 ホセ・ロドリゲス・カルバッリョ、OFM



## プロジェクト

**創立の恵み**を祝うことによって、私たちは聖フランシスコに立ち返り、聖フランシスコは私たちをキリストとその福音に差し向けてくれました。**原始会則**には、「キリストに従うこと」(Sequela Christi)をラディカルに要求するようないくつかの福音書の言葉が含まれていました。新たな忠実さで師父フランシスコに従うために、福音から再出発しましょう。そして、福音をフランシスコと共に生き、私たちのカリスマの**優先課題** (Priorities) を現代に実現させましょう。

**福音こそは私たちの会則と生活です** (裁可会則 1:1 参照)。このことは私たちの誓願の本質的な中心をなしています (会憲 5:2)。それはつまり、福音を私たち個人および共同体の生活の最高の規範とすることであり、イエスというお方を中心に置き、福音に私たちの決定やプロジェクトを照らし導いてもらうことであり、神の求められることがいかにラディカルであろうとも、それに信頼し、自分自身を賭け、委ねつつ、神の冒険に与ることなのです。

フランシスカンのカリスマが芽生えた中心、すなわち、福音そのものから再出発するということは、「制度としての会」や複雑になる組織化が絡む前のフランシスコの**靈的直観**に戻るということです (1 チェラノ 84 参照)。

私たちは神の御言葉を研究したり、他の人々に教えたりします

が、御言葉を心に響かせて心の中に宿らせること、あるいは一貫性をもって心からそれを生きることを忘れていています。私たちの生活を一貫したものにするためには、御言葉を知性から心へ、知識から個人的な堅実さへ、知的な信仰から生きた信仰へと変える必要があります。「悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ 1:15）と言われたイエスの呼びかけに対して、新たな気構えで耳を傾けなくてはなりません。

私たちは、引き継がれて来たあまりにも多くの組織を「維持する」ことと、あまりにも多くの活動を伴う福音化するミッションを遂行することを余儀なくされて、肉体的にも精神的にも疲れきっていることがよくあります。人間と精神 (person and spirit) を第一にすること、そして、行動主義を特徴とする福音宣教から、真の意味で福音的な新しい生活と活動の場（在り方）を特徴とする福音宣教へと変えて行くことが必要です。

**私たちのプロジェクトはキリストとその福音から再出発することです。それは、常に福音に照らされて生き、働くため、そして、教会と世界にキリストの実りの豊かさを新たに示すためです。**

価値観が深刻な危機に陥っている時に生きていて、あらゆる精神的な基盤を失っている多くの人々は、私たちに**確かな福音のあかし**を求めています。そして、この世界に挑戦するような神の現存と神の愛を目に見える形で示すようにも、私たちに求めているのです。



## 歩むべき道

共に出発したいと思うこの旅には、三つの段階があります。それは次のようなものです。

- 1) 私たちの生活の質を刷新するために、**福音の賜物を生きる**。
- 2) 私たちの福音化するミッションを再活性化するために具体的なジェスチャーと創造性をもって、世界に**福音の賜物をお返しする**。
- 3) より身軽で、自由で、存在意義のある預言的な人間であるために、**私たちの生活と活動の場（在り方）、そして組織を再構築する（refound）**。

そのダイナミズムを表す動詞は、**生きる、お返しする、再構築する**、で表します。その中心にあるのは、常に、御言葉が肉となられたイエスというお方そのものである生きた福音です。そのお方をこそ、私たちは、自分の中で、自分のミッションの中で、そして自分の組織の中で、「現代に生きるものになりたい」のです。

## ここで用いられる方法論について

2009年の聖霊降臨後の総集会の文書には、上記の**三つのテーマ**が含まれており、それぞれには固有な論理と展開の仕方（帰結）があります。私たちはそれらが、会の兄弟共同体や管区（構成単位）を、刷新と新しい「創造的な忠実さ」に導くための具体的で本質的な手引きとなり得ると信じています。総集会の指示（指

令1参照)に従い、各テーマを**宣教的な「緊張感」**(missionary tension)と**世界への開かれた視点**で、熟考し、実践することが必要です。各テーマは**二年間の行程**として示されており、管区や分管区に独自のプログラムを作成する自由を与えています。各構成単位も、この場合、独自の副題を活用しながら、一年計画を作成することができます。

テーマごとに、目指すべき理想を示す根本的な**インスピレーション**が新たに与えられます。そこで用いられているのは、フランスコが特別に重視した福音書の箇所、二つの会則(未裁可会則と裁可会則)、会憲、2009年の総集会総括文書「**福音の賜物の使者(BGG)**」です。その後、いくつかの**方法(mediations)**が示されます。たとえば、総集会の**指令**に記されたもの、あるいは刷新のためのさまざまな事務局や担当室が推進していて、刷新のための道具と考えられているプログラムや活動などです。その後、いくつかの**具体的な提案**(選択や約束)が示されます。最後に、テーマが必ず生活に取り入れられる役に立つようないくつかの**ジェスチャー**や**しるし**が示されます。これらの提案は多様ですが、それは、各構成単位がその置かれた場所や文化に応じて選択する余地を与えられるためです。

各兄弟共同体で「インスピレーション」からテーマを掘り下げて研究するために、**エンマウスの方法論**を利用なさることをお勧めします。この方法論には、集まること、それぞれのテーマに沿った体験について話すこと、それらの体験を御言葉と会則に照らして読み返すこと、いただいた賜物について神に祈り、神を賛美

すること、兄弟的な関係を祝うこと、良い知らせを新たに携えて、世界の兄弟姉妹たちの所に戻ることに含まれます (LSR 45 参照)。



2010年－2011年

## 福音の賜物を生きよう

そこで、12人を任命し、使徒と名付けられた。彼らを自分のそばに置くため、また、派遣して宣教させるためであった（マルコ 3:14）。

それで、私たちは主の言葉と生活、また、主の教えと聖なる福音を守ろう。主は、私たちのために御自分の父に祈り、その御名を現わして言われた。父よ、御名の栄光を現わしてください（未裁可会則 22:41）。

福音からの再出発  
使徒としてあかし人として  
現代世界に耳を傾ける



## インスピレーション

すべての源は神にあり、すべての現実は神の賜物として現れます。中でも、**私たちがいただいた最高の賜物は神の御子、イエス・キリストの福音**です。この賜物が、アシジのフランシスコの生活を変えたのであり、私たち一人ひとりの生活を変え続けてくれるのです (BGG 5)。「アシジの小さき貧者は自分のことを福音の光に照らして十分に理解していた」とベネディクト 16 世は述べています。そのような**福音的な生活様式**とは、**聖フランシスコが示し、原始会則**として教皇イノセント 3 世に口頭で認可され、**未裁可会則**に記されているように、**イエスの御跡に完全に従う**ことです (未裁可会則 1:1-5=マタイ 19:21, 16:24, 19:29 参照)。

- 私たちは自分の召命と誓願が、イエスのまことの弟子となり (未裁可会則 1:1、裁可会則 1:1)、「**聖フランシスコが守り、かつ示した生活様式に従って**」(会憲 1:1) 福音を生きることであることを、十分に認識しているでしょうか。

「霊的な字義通りさで」福音を生きるということは、福音の根源から再出発するということです。そうすることにより、私たちは以下の優先課題の根本的な統一性を再発見することができます：

- ※ **観想的側面**は信仰の賜物 (会憲 5) と聖福音の定期的な奉読と黙想 (会憲 22) によって養われる。
- ※ 兄弟共同体における生活の交わりは「**神から授かった賜物**」(会憲 40) である兄弟一人ひとりから生まれ、「福音的な」生

活様式によって表現される（会憲 38）。

- ※ **小ささ、貧しさ、連帯**における生活は、「世の中においては旅人であり、寄留の身」であることを表す（会憲 64）。
- ※ **小さき兄弟のミッション**は、生活と言葉によるあかしを通して福音を告げ知らせることに他ならない（会憲 83:1, 88）。
- ※ **養成**がまずもって持つ任務は、フランシスカンの福音の生き方を開示して、体験させることである（会憲 127:4）。
- ※ **勉学**は「福音を宣べ伝えるため」によく準備するためである（会憲 162）。

フランシスコとその仲間たちは、福音を受け入れ、守ることによって、自分たちの直感を具体的なものに変える選択をすることができました。それは特に、金銭に関すること、「馬に乗ること」、特権を捨てること、神の御摂理に信頼すること、「預言的な兄弟共同体」の世話をすること、「時のしるしを読み、福音の教えを当時の人々に分かりやすい具体的な方法で実践する能力を持つこと」（BGG 8）に関する選択です。フランシスコは、福音の賜物と**賜物の論理**から出発しながら、優れた**福音的な想像力**（BGG 9）を発達させて、平和の福音を告げ知らせる者となったのでした。それゆえ、イエスに従うためには、イエスと共に神の国を告げ知らせることが必要であるということを、ポルチウンクラで弟子たちを派遣する福音箇所が朗読されるのを聞いた時に、フランシスコは悟ったのです。このことは、**原始会則**に取り入れられ、**未裁可会則**にも記されています（未裁可会則 14:1-14 = ルカ 9:4-5;10:5-7 参照）。



聖フランシスコは、自分がイエスのあかしとならなければ、まことの弟子とはなれないことを知っていました。そして、この「悟り」は彼の心を喜びで満たし、次のように言わしめたのです：「これこそ、私が望み、探し求め、心からしてみたいと熱望していたものです」（1 チェラノ 22）。フランシスコにとって、**福音的召命は福音化と密接につながっており**、キリストとその御言葉との出会いの表現となっています（3人の伴侶 13、1 チェラノ 22 参照）。このように、「創立当初から、兄弟共同体は自分が体験していることを告げ知らせるように招かれていることを知っていました」（BGG 7）。

昔も今も、**すべての小さき兄弟たちは**、「全世界およびすべての被造物に福音を宣べ伝えるように派遣されて」（会憲 83:1）います。兄弟たちは「教会全体が持っている福音宣教の任務に与る」（会憲 83:2）のです。そして、「どこにいても、どういう仕事をしても、福音宣教の任務に携わります」（会憲 84）。弟子およびあかし人としての生活とは、**巡業の旅をする**生活であると同時に、私たちが修道院と考えているこの世界への**愛情**です。それはまた、貧しい人々、道ばたに見捨てられている人々の生活を分かち合うことでもあります（BGG 7 参照）。

- 私たちは、人々の疑問に**耳を傾け**、意味を請い求める者となる術を知っているでしょうか（LSR 6 参照）。
- 私たちは救いへと向かう道を喜んでこの世界と**共に歩ん**でいるでしょうか（BGG 29）。

## 方法 (mediations)

### ● 識別の時

#### 再評価と識別の期間のための手引き I.

(見ること：私たちはどこにいるのか。可能性と弱点を含めた私たちの生活の質と、私たちの福音的なアイデンティティ、および、教会と世界の中で私たちはどこにいるのかを分析しなさい—2010年。)

#### 再評価と識別の期間のための手引き II.

(判断すること：聖霊は私たちをどこへ導こうとしておられるのか—2011年。)

- ・ 管区または管区合同（管区長協議会）の一つの兄弟共同体に祈りの学び舎を一つ設立する（総集会の指令9）。
- ・ 養成学問担当総本部事務局、福音宣教担当総本部事務局、正義と平和エコロジー担当室による刷新の着手。

### 具体的な提案

- ◆ 福音およびイエスというお方との出会いを育むために、個人として、また共同体として、定期的かつ頻繁に、御言葉を祈りを込めて奉読する（総集会の指令12、会憲22）。
- ◆ 信徒やフランスカン家族、および他のキリスト教の信徒たちと、聖書研究の集まり、聖書を読む会、御言葉の祈りを込めた奉読の会を開く。

- ◆ キリストに従うこと (sequela Christi) に伴うラディカルな要求に応じて、私たちの個人および共同体としての生活の質を見直す。たとえば、節度のある服装や食生活、個人または共同体で使用する車や他の技術的な手段の所有権、現在使われなくなっている場所の用途、疎外された人々のために働く信徒やミッションと連携するプロジェクトなど。

## ジェスチャーやしるし

- ✓ 2010年の「アンジのゆるし」(Pardon of Assisi) を契機として、兄弟的な関係を清め、刷新するために、兄弟共同体における和睦の式典を行う。
- ✓ 2011年10月27日に「アンジの精神」の25周年記念を祝う。その前に、三日間の**静修日** (Triduum) を設ける (総集会の指令 29)。
- ✓ 聖地を、特に特別分管区のDVDを通じて、福音を具現する場とする。



2012年－2013年

福音の賜物をお返りする

全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい（マルコ 16:15）。

わたしたちが見、また聞いたことを、あなたがたに伝えるのは、あなたがたもわたしたちとの交わりを持つようになるためです（1ヨハネ 1:3）。

全世界に行って  
（人々の間に在って、諸国の民に向けて）  
（inter gentes & ad gentes）  
兄弟性と小ささのうちに  
福音化するミッションを生きる



## インスピレーション

聖フランシスコは私たちにこう諭しています（未裁可会則 17:17, 23:8 参照）。「私たちに属するものは何もない。私たちに与えられているあらゆるよいものは、私たちの所有ではなく、皆と分かち合い、皆に返されるものです」（LSR 19）。**第一の偉大な賜物は福音であり、私たちはそれを自分の生活をもってお返すように求められています**（BGG 10, 11 参照）。私たち小さき兄弟は、ご聖体に由来する**賜物の論理で生きるように**（訓戒の言葉 1、全兄弟会に宛てた手紙 28-29、LSR 22 参照）、そして、私たちの福音化するミッションのことを、いただいた**福音の賜物を他の人々にお返しすること**であると考えようように求められていると感じています。

- 私たちの第一の責務が、イエスの御言葉に耳を傾けることを学び、それを現代の人々にお返しすることである（BGG 10 参照）ことを、私たちはきちんと認識しているでしょうか。

福音宣教の第一の形態は兄弟共同体での生活の交わりです（会憲 87:2 参照）。「福音化するのは常に兄弟共同体なのです」（BGG 27）。兄弟が一人で何か活動したとしても、その兄弟は兄弟共同体を代表して、共同体の命を受けて働いているのです。それが現実の日常生活の在り方であることを確認するためには、**兄弟的な生活とミッションのプロジェクト**が、「福音化するミッションを私たちの生活の中に根付かせ、そこに私たちの決断を導く優先課題を打ち立てる」（BGG 28）ような方法で実行される必要があります。私た

ちは取るに足りないとされている人々の兄弟姉妹として、「すべての人のしもべおよび臣下、平和を愛する心の謙遜な者として」（会憲 64）世の中を巡ります。

- 私たちの兄弟的な関係は、**単純さ**によって、出会うどの人よりも自分自身を「**小さき者**」とすることによって（会憲 67 参照）、特徴づけられているでしょうか。
- 他の人々との関係において自らを「**小さき者**」とすることは、他の人々が「**自分の真実の姿を示す (epiphany)**」上で、また、人間の尊厳を認める上で役に立っているでしょうか（会憲 68:1 参照）。
- 小さき者としての生き方は、私たちが**勇気ある選択**をするように導いているでしょうか。たとえば、多くの移民たちの生活しているところへと私たちを導いているでしょうか（BGG 23 参照）。

自分が受けた福音の賜物を他の人々にもたらしたいと望む福音的な兄弟共同体は、**時のしるしを読み**、その潮時と緊急性を把握し、複雑な問題を抱える人々の生活を深く分かち合う術を知らなくてはなりません（BGG 14 参照）。

- 私たちは、現代の地理的辺境や文化人類学的な壁を越えて生きる術を知っているでしょうか（BGG 22 参照）。



- 異文化と諸宗教が混在する場に生きている私たちは、対話に向けて自らを養成し、また、福音の賜物をこれらの地域にお返しするように自らを養成する術を知っているでしょうか (BGG 24 参照)。

聖フランシスコは**二つの福音化の方法**を示してくれました。一つは静かなあかし (未裁可会則 16:6、会憲 90-99 参照)、もう一つは御言葉をはっきりと告げ知らせること (未裁可会則 16:7、会憲 100-110) です。これら二つの方法には、「主の霊に心を開くことによって初めて可能となる**人々の間に在る (inter gentes)** ミッションの特徴と**諸国の民への (ad gentes)** ミッションの特徴」 (BGG 20) が織り込まれています。特に、兄弟たちは、自分がキリスト者であることを宣言しつつ、また、「社会においては取るに足りないとされる人々の生活と境遇を受け入れ、常に彼らの間で、小さき者として生き」(会憲 66:1) つつ、人々の間で(inter gentes) 生活し、すべての人の臣下となるのです。**人々の間に在る (inter gentes)** ミッションとは、**福音の賜物をお返しする旅**に他なりません。つまり、その模範は、受肉された御言葉にあり、現代においてそれを具現すること、そして、「主が私たちを派遣される場所での在り方を示す」(BGG 13) ことが求められています。

- 人々の間にあって、自分のミッションを生き、果たすために、自分自身を**中心から外す術**を私たちは知っているでしょうか (BGG 14 参照)。
- **さまざまなレベルで対話を実践する術**を知っているでしょう

か (BGG 15 参照)。

- 「世の言葉を学び、メッセージを分かりやすくする伝達方法を学ぶ」(BGG 16) ことによって、自分自身を文化内開花(受肉) させる術を知っているでしょうか。

「**人々の間に在る**ミッションが最もよく表現され、ある意味で成就しているのは、**諸国の民への**ミッションにおいてです」(BGG 18-19)。そのためには、最初の告知(ケリグマ: 救いのメッセージ)、回心への呼びかけ、教会の創設、または未だ脆弱で不完全な既存の教会の支援と開発(会憲 117:2 参照)、フランシスカン・カリスマの提示と具現が不可欠です。

**諸国の民への**ミッションは、人間の思いつきによるものではなく、神のインスピレーションによるものです(裁可会則 12:1 参照)。神からの靈感に突き動かされて、兄弟たちは地理的、文化人類学的境界を越え、「辺境の地に住み」、巡業の旅をしながら(BGG 22 参照)、苦しみ疎外されている人々と連帯し(BGG 23 参照)、多くの人々の場となっている「共通の場を分かち合い」(BGG 24)、「信徒と共に力を合わせて」私たちのミッションを分かち合うのです。「それこそは、神の教会に対する神の賜物である福音に正しく応えることにほかなりません」(BGG 25 参照)。

- 私たちは「ともすれば萎えがちな宣教者としての力と情熱を再発見する」(BGG 20) 術を知っているでしょうか。それによって、私たちは聖霊に従う気持ちを新たにし、主からの靈感

を心から受け入れることができるのです。

## 方法 (mediations)

### ● 識別の時

#### 再評価と識別の期間のための手引き Ⅲ.

(行動すること：私たちはどこへ行きたいのか。近い将来のために取るべき道－2012年。)

- ・ 諸宗教間の対話及び異文化間の対話のための奉仕を支え、活性化する (総集会の指令 28)。
- ・ 管区が「兄弟共同体としての生活とミッションのプランを作成する」のを助け (BGG 28)、「本総集会から出された方針に照らして、兄弟的な生活プロジェクトを立案するにあたり、各兄弟共同体を助ける」(総集会の指令 7)。
- ・ 養成学問担当総本部事務局、福音宣教担当総本部事務局、正義と平和・エコロジー担当室による活性化と企画。
- ・ 総評議会 (総集会の指令 46)。

### 具体的な提案

- ◆ 社会に対する敏感さを養い、時と場所のしるしを注意深く読みつつ(BGG 29 参照)、「養成的な宣教体験」(総集会の指令 18)でもって、論理的かつ実践的なレベルで福音化するミッションに向けての養成を推進する (総集会の指令 17)。
- ◆ 2009年の総集会で示されたように (BGG 12-26 参照)、福

音の賜物をお返しする道をいかにして進むべきかを考える。

- ◆ 本会から提供された手引き等を活用しながら、小教区や教育の現場で、私たちの奉仕職をより「宣教的なもの」(ミッションナリー) にして行く。
- ◆ 正義と平和とエコロジーの価値—福音に根ざした価値—を私たちの祈りと献身の生活の中に、また、私たちの日常生活と使徒職の実践の中にもっとにじみ出るようにする (BGG 30)。

## ジェスチャーやしるし

- ✓ 管区 (構成単位) の中で、少なくとも一つの兄弟共同体が「総集会の指令 13」に基づく新しい福音宣教の要請に応えられるようにする。
- ✓ 10月を祝祭、養成、ミッションへの献身の月と定める。
- ✓ 財政的または人的支援を行うことで、本会のミッションへの連帯を示すことにより、福音の賜物をお返しするよう全身全霊で取り組む。
- ✓ 兄弟共同体は、その置かれている地域に暮らしている宗教や文化の異なる移民たちとの集まりを推進する。

2014年－2015年

私たちの生活と活動の場（在り方）を  
立て直そう

あなたの天幕に場所を広く取れ（イザヤ 54:2）。

彼女（貴婦人清貧）をある丘に連れてゆき、見渡す事のできる世界のすべてを彼女に示して言った：「婦人よ、これこそ私たちの修道院です」と（サクルム・コンメルチウム 63）。私たちの修道院とは、この世界なのです。

私たち一人ひとり、兄弟共同体、  
活動、組織をすべて見直し、刷新する  
そして  
協力体制を作り、再構築を図る



## インスピレーション

私たちの**根本的な選択**とは、フランシスコが示してくれたやり方に従って福音の賜物を生きること、そしてそれを、前代未聞のパラダイム、カテゴリー、挑戦を突き付ける急激な変化の時代にあるこの世界に、兄弟として、また、小さき者として、お返しすることです。そのことに気づくためには、絶えざる識別、**私たちが実際に選択したことの真剣な見直し**、そして特に、「効果的な在り方とあかしについての未知の道をあえて取る」ことが必要です (LSR 33)。

私たちは今、絶えず自分の生活を見直すように求められています。それは、私たちの兄弟共同体の中に次のような**無気力の諸徴候**が見られるためです。

- ※ 少なからぬ数の兄弟が周囲の人々の想像力と熱意を失わせるような倦怠と諦めを示していること、
  - ※ 多くの兄弟が自分に過度の活動を課しているために、身体的にも精神的にも疲れきってしまっていること、
  - ※ 修道院や管区や会全体への帰属意識が希薄になり、それが、「個人主義者」や逆に「地元優先主義者」を生んでいること、
  - ※ 自分の場所に閉じこもり、非協力的で、管区間の協力に対してすらも消極的で、それが、存在意義や生活の質を低下させていること、
  - ※ 召命がさまざまな面で弱まり、信仰の危機が頻繁に見られて、兄弟たちの選択や行動を導くものではなくなっていること。
- これらの似通った徴候は、私たちの生活と活動の場（在り方）を

浄化し、活性化させ、刷新して、それに伴う結果を受け入れる必要があることを教えてください。

これは福音を土台として私たちの生活を「立て直す」ことですが、「立て直す」と言っても、組織に限られるわけではなく、実際には個人から、つまり、兄弟たちと兄弟共同体から始まるものです。私たちの福音的な生活と福音化するミッションの質を立て直さない限り、仕事や管区を再編するだけでは不十分です。それゆえに、生活とミッションに常に役立つように、私たちの組織を見直すことが重要なのです。

**再び始める時がやってきました。**創立時と同じ熱意で、福音という私たちのカリスマの根源から、つまり、ある日私たちに呼びかけ、御自分のもとに招き寄せられたイエスというお方から再出発する時がやってきたのです。

**私たちの人間性を「立て直す」時がやってきました。**そのより肯定的な側面において、また、相互の人間関係において。**私たちの信仰を「立て直す」時がやってきたのです。**それは、私たちの信仰がキリストとのより個人的な出会いとなり、御父の愛を体験することができるためであり、福音とフランシスカン生活への**私たちの誓願を「立て直し、新たに作る」**ためなのです。

**私たちの兄弟共同体を定義し直す時がやってきました。**そのためには、特別な配慮（LSR 27 参照）と、「同伴と母親的配慮が初期養成のときだけではなく、生涯にわたって必要なのです」（LSR



32)。

小さき兄弟である一人ひとりがいかなる活動や場所よりも優先することを意識して、することよりも在り方に、活動よりも生活に常に重点を置くべきであることを意識して、私たちの生活と活動の場（在り方）を再設計（re-design）する必要も出てきています。人材が今の二倍もいた過去に約束したことを引き続き保証することはできません。ですから、**私たちの生活の質を強化するためには、活動と仕事を削減することが急務**なのです。さまざまなタイプの活動（小教区、巡礼地、学校、青年司牧、次々に出てくる新しい形態の使徒職）についての**優先順位**や、生活と活動の場（在り方）の**類型**（養成修道院、伝統的かつ新しい形態の福音宣教を行う兄弟共同体）についての**優先順位**の**識別**を徹底して行うことが不可欠です。私たちの召命に対する応答と、生活とミッションの福音的プロジェクトを活性化するためには、私たちの活動を再設計することが必要です。

会の**諸管区（構成単位）**もまた、刷新と再編を求められています。それは、管区自体が小さき兄弟一人ひとりの「喜びに満ちた創造的な」忠実さを妨げることなく、支えることができるためです。「組織は必要です。しかし、生活の役に立つものでなくてはなりません。[...] 私たちの組織は、福音化すると同時に観想的でもある**派遣されて宣教する使命を帯びた兄弟共同体**という私たち独自のカリスマから生まれ出るものであるべきなのです（2001年総評議会の総括文書「変わりゆく世界に派遣されて宣教する使命を帯びた兄弟共同体」ヒントとなる重要事項 3）。再構築

(restructuring) には、必然的に変化が伴います。今日、「私たちの会においては、これはかつてないほどはっきりした現実であり、それは私たちに視野の狭いメンタリティーを克服し、管区を越えた見通しと管区長協議会、および会への帰属意識を高めるためのまたとないチャンスを与えてくれています」(BGG 31)。

会の将来が通らなければならない道、すなわち**管区間の協力**への道は、「私たちの生活と活動の場（在り方）と管区の《再編(re-alignment)》へと通じており、それは、閉鎖や合併などを含むのが普通です。しかし、これは見直しと再構築の一部なのです」(BGG 31)。そのような組織の立て直しのプロセスは、確かに痛みを伴いますが、私たちはそれを「復活の恵みを発見し、より素朴でより繊細な形で、しかし、より預言的で確かにもっと小さき者として、自分の居場所に何らかの意義を見出す時」と考えるように求められています (BGG 31)。

私たちの内部の再構築はまた、本会が注意を向けるべき現代の世界 (BGG 14) と「時のしるしを読むこと」(BGG 29) から生まれる挑戦や緊急の課題によって導かれるものでなくてはなりません。「**諸国の民への**」ミッションでさえ、「各管区（構成単位）間の協力と、まだ若い管区と古くからの伝統を持つ管区との間の意見交換」(BGG 21) を必要とするのです。

## 方法 (mediations)

- 本会の現状と統治に関する学術的研究において協力する（総

集会の指令 14, 45)。

- 生活と活動の場（在り方）の再編と再構築の視点から、「その目的と方法と類型」を明らかにする（総集会の指令 47）。
- 管区間の協力を推進するため、2009年総集会総括文書「福音の賜物の使者」21 に示されている手段を実行に移す。

## 具体的な提案

- ◆ 管区間、管区長協議会間および会全体のレベルでの協力体制－財政面も含めて－をつくる。
- ◆ 国際的で多文化的な養成の家を設置する、または支援する（総集会の指令 37）。
- ◆ 2006年の臨時総集会で提案された相互依存的、多文化的、国際的な兄弟共同体に関する具体的な指示を実行に移す（LSR 57）。
- ◆ 諸管区（構成単位）の活動を見直し、私たちの組織の多くに新たな目的を持たせる。

## ジェスチャーやしるし

- ✓ 福音宣教プロジェクトや管区合同のミッション・プロジェクトを開始する、または発展させる（総集会の指令 30）。
- ✓ 福音宣教の活動や仕事において、信徒との協力体制を強化する（総集会の指令 31）。
- ✓ 「フランシスカン霊性の視点から」透明性、連帯、倫理についての養成計画を作る（総集会の指令 54）。

- ✓ 現代世界における私たちの生活と活動の場（在り方）というテーマで、フランシスカン家族や信徒の参加を得て、管区合同の幕屋の集会を開く。

## その他の補足的な刷新活動

## 定期的な活動

- ◇ 1月に行われる新規選出の管区長を交えての総理事会の定例会。5月に行われる管区長協議会会長との集まり、11月に行われる総視察者との集まり。
- ◇ 管区長協議会との総理事会の集まり
- ◇ 管区長協議会の集まり（2年に一度）
- ◇ 聖地、モロッコ、アフリカ、アマゾン、アジア、東西ヨーロッパにおけるミッションの生活と活動の場（在り方）を支援し、推進する（総集会の指令 21-27）
- ◇ トルコのイスタンブールでの、エキュメニカルな対話と諸宗教間の対話に関する研修プログラム（毎年10月）
- ◇ PUA（ローマ聖アントニオ神学大学）で養成担当者の養成のための修士課程（毎年）
- ◇ PUAでのJPICに関する研修プログラム（毎年）
- ◇ ブラジルのペトロポリスITFでの福音宣教に関する修士課程
- ◇ ブリュッセルでの宣教師養成のための研修プログラム

## 2010年

- ◇ 総長直轄修道院のための幕屋の集会
- ◇ アジアの養成担当者会議（有期誓願者、志願者の担当者または召命担当者）
- ◇ アフリカのJPIC推進者の集まり
- ◇ ポーランドでヨーロッパのJPIC推進者の集まり

- ◇ ラテンアメリカでフランシスカン教育者の第4回国際大会

## 2011年

- ◇ 南米の養成担当者会議（有期誓願者、志願者の担当者または召命担当者）
- ◇ アフリカの養成担当者会議（有期誓願者、志願者の担当者または召命担当者）
- ◇ スペインのトレドでのコンセプションニスト姉妹会の第二回連合会長会議
- ◇ OFMの司教、大司教、枢機卿の第二回会議
- ◇ 本会に委託された代牧区の第三回会議
- ◇ スペインでのWYD（世界青年の日）へのフランシスカン家族の参加
- ◇ 「アシジの精神」の25周年記念会議（2011年10月27日）

## 2012年

- ◇ クララ会の創立800年祭
- ◇ 西ヨーロッパの養成担当者会議（有期誓願者、志願者の担当者または召命担当者）
- ◇ 北米の養成担当者会議（有期誓願者、志願者の担当者または召命担当者）
- ◇ 東ヨーロッパの養成担当者会議（有期誓願者、志願者の担当者または召命担当者）

- ◇ アシジでの第二回クララ会連合会長会議
- ◇ アシジでのクララ会連合とコンセプショニスト会連合の霊的補佐の国際会議
- ◇ 荘厳誓願宣立後10年未満の兄弟たちの第4回国際幕屋の集会

## 2013年

- ◇ 会の総評議会
- ◇ アシジで開かれる管区の養成学問担当者の国際会議
- ◇ 会のアーキビスト（公文書資料管理保管係）の国際会議
- ◇ ヤング・フランシスカン（YouFra）の国際大会

## 2014年

- ◇ 福音化するミッションに関する国際会議
- ◇ 会憲の第5章に掲げる「神はあなたがたを全世界にお遣わしになった」というテーマに関する生涯養成の手引き

## 2015年

- ◇ OFM総集会



## 略号

GGCC	会憲
PC0	総評議会
ICe1	チェラノによる聖フランシスコの第一伝記
L3C	三人の伴侶による聖フランシスコ伝
JMj	ボナベントゥラによる聖フランシスコの大伝記
BGG	2009年総集会総括文書「福音の賜物の使者」
Rb	裁可された会則（裁可会則）
Rnb	裁可されていない会則（未裁可会則）
ScEx	サクルム・コンメルチウム
LgP	2003年総集会総括文書「主が平和を与えてくださる ように」
LSR	2006年臨時総集会総括文書「主は道々私たちに話し てくださる」
VC	奉献生活



# 再評価と識別の期間 のための総理事会からの手引き

## 識別のための時間をとる

本会のすべての構成単位は、私たちの現実（弱さと可能性）、教会の要請、本会の最近の文書及び時のしるしを考慮にいれ、2010年－2012年に考察と識別のプロセスに入る。考察と識別は、次のような質問に基づき行われる。すなわち、①私たちはどこにいるか。②私たちはどこへ向かっているか。③聖霊は私たちをどこへ導こうとされているのか。それは、近い将来に具体的な選択をするためである。

【参照：2009年アシジ総集会の指令10（公報・アシジ総集会 p131）】

ローマ 2010年



## プレゼンテーション

親愛なる兄弟の皆様

主が平和をお与えくださいますように！

この短い手引きをお送りするにあたり、兄弟の皆様には2009年の聖霊降臨の総集会で決定された「再評価と識別の期間」について、真剣に考えてくださるようお願いいたします。この手引きで私どもが提供する質問への答えの大半は、福音の賜物の使者としての私たちの現在と未来から生まれてくるものです。

「再評価と識別の期間」は、過去を感謝の心で見つめ、現在を情熱をもって生き、未来を希望をもって描くために神が私たちにくださっている恵みの時なのです。この期間はまた、私たちが生活とミッションを見直し、新しい在り方と証しによって新たな勢いで再スタートを切るために与えられているテンポ・フォルテ（集中期間）でもあります。

立ち止まって私たちの生活とミッションをもっと深く見つめる勇気が、私たちにはあります。意味のない安易な言葉や深く考えもせずに行動する活動主義に囚われてはなりません。

無原罪の聖母と師父聖フランシスコのとりなしによって、主の聖なる御旨を知り、行う明晰さと大胆さを主が私たちにお与えくださいますように。

皆様方の総長でありしもべである

兄弟 ホセ・ロドリゲス・カルバリョ、ofm

2010年1月1日、ローマにて

## 動機

2009年の総集会は、個人として、また兄弟としての識別のプロセスに取りかかるという願いを表明しました。総集会が感じ取っていることは、時と場所のしるしを福音と私たちのカリスマの光に照らして読み解釈すること、そして、内的生活、兄弟生活、小さくあることと福音化するミッションの生活との間のつながりを再発見すること、さらに、私たちの生活を現代の諸問題に向き合うように立て直す、といったことの緊急性です。

総集会は会のすべての構成単位（管区）に対して、2010年から2012年にかけて実行すべき「再評価と識別の期間」を提示しました。それは、識別のための道具です。

## 方法論的なガイドライン

- エンマウスの方法論 (p9) を心に留め、「再評価と識別の期間」を、“見て”、“判断して”、“行動する”という段階を踏んで行うのが望ましい。
- 管区長または分管区長とその理事会は、生涯養成担当者と協力し、必要なら外部の専門家の助けを借りて、「再評価と識別の期間」の行程 (itinerary) を企画し、支える。そして、最後にすべてをまとめ、要約したものを総本部に送る。
- このような行程をすでに始めている管区または分管区は、絶

えざる傾聴と識別に、また、新たな答えと新たな選択の探求に自らを適応させるために、行程をやり直すことが求められる。

- この手引き本文に付された質問と参考資料の一覧は、示唆に富んでおり、兄弟たちは本文の分析と考察と選択を創造的に深めることができる。

## I. 見ること — 私たちはどこにいるのか

### 1. 信仰と祈りの生活において、私たちはどこにいるのか。

- a. 信仰、神体験、福音的生活、福音的勧告の誓約において、頼もしいしるしと思われるところと危機的だと思われるところを検証し、明らかにしなさい。
- b. 創造的な忠実さを検証し、三位一体との関係、師父フランシスコの模範にならって福音に従うこと、深い霊的な体験（日常的な黙想、御言葉の祈りを込めた奉読、霊操や新しい形の祈りと信心への参加など・・・）を深めるような手段と実践に対する真摯な尊敬を検証しなさい。

### 2. 兄弟共同体における交わりの生活の中で、私たちはどこにいるのか。

- a. 兄弟的生活の質のしるしとその目に見える形を検証し、明らかにしなさい。
- b. 兄弟的な生活の道具（修道院会議、兄弟的生活とミッション

のプロジェクト、生涯養成のプロジェクトと効果的な方法など)を活用しようとする不断の努力を検証しなさい。

- c. 貧しく、質素で、消費主義でなく、環境を大切にする生活様式を検証しなさい。
- d. 兄弟共同体とその活動の長所を見ながら、私たちの根本的でカリスマ的な価値と、組織、活動、在り方、生活様式との間に矛盾がないかどうか分析しなさい。

### 3. 教会の中で、私たちはどこにいるのか。

- a. 小さき兄弟として、地方教会の生活と福音化のミッションに、固有の創造的な形で貢献しているか検証しなさい。
- b. 私たちの在り方、活動、組織が、地方教会と諸国の民へのミッションにおいて、フランシスカンの福音宣教に合致しているかどうかを分析しなさい。

### 4. この世界の中で、私たちはどこにいるのか。

人々の間での私たちのあり方、証し、貧しい人々との関わり、時のしるしと場所のしるしに対する敏感さ、福音化するミッションや正義と平和とエコロジーへの献身が、私たちフランシスカンの召命にかなっているか、また、現代世界にとって重要な意味をもっているか分析し、検証しなさい。

## II. 判断すること—聖霊は私たちをどこへ導こうとしておられるのか

### 1. 信仰と祈りの生活において、聖霊は私たちをどこへ導こうと



### しておられるのか。

- a. ヨハネ 15:1-11 を祈りを込めて読み、聖霊が私たちに求めておられることを受け入れなさい。(p11)
- b. 裁可会則の第1章と会憲の1-2章を読み、研究しなさい。(p11&p12)
- c. 2003年総括文書「主があなたに平和を与えてくださいますように」22-27(p19)、2006年総括文書「主は道々私たちに話してくださる」10-25(p21)、2009年総括文書「福音の賜物の使者」5-10(p27)を読み、研究しなさい。

### 2. 兄弟性と小さくあることの交わりの生活の中で、聖霊は私たちをどこへ導こうとしておられるのか。

- a. フィリピの信徒への手紙 2:1-16 を祈りを込めて読み、聖霊が私たちに求めておられることを受け入れなさい。(p29)
- b. 裁可会則の4, 5, 6章および10章(p29)と会憲の3章(p31)をじっくり読み、研究しなさい。
- c. 2003年総括文書33-38(p34)、2006年総括文書26-32(p38)、2009年総括文書26-28、31(p40)をじっくり読み、研究しなさい。

### 3. 教会の中で、また教会への奉仕の中で、聖霊は私たちをどこへ導こうとしておられるのか。

- a. ルカ 10:1-9 を祈りを込めて読み、聖霊が私たちに求めておられることを受け入れなさい。(p42)
- b. 裁可会則9章と12章および会憲の5章をじっくり読み、研究しなさい。

- c. 2006 年総括文書 33-38 (p49)、2009 年総括文書 11-12、17-21、25 (p51)、「奉獻生活」29-34(p54)、「キリストからの再出発」5-10(p59)、「福音を述べ伝える (EN)」78(p62)、「救い主の使命 (RM)」69(p63)をじっくり読み、研究しなさい。

#### 4. 世の中で、時のしるしと場所のしるしを通して、聖霊は私たちをどこへ導こうとしておられるのか。

- a. マタイ 5:1-16 を祈りを込めて読み、聖霊が私たちに求めておられることを受け入れなさい。(p64)
- b. 裁可会則の3章と5章 (p65)、および会憲の4章 (p65) をじっくり読み、研究しなさい。
- c. 2003年総集会総括文書 28-41 (p68)、2006年臨時総集会総括文書 4-6 (p71)、2009年総集会総括文書 13-16、22-24、29-30 (p72) をじっくり読み、研究しなさい。
- d. 私たちの生活様式、あり方、奉仕において、私たちに挑戦する時のしるしを読みなさい。

### III. 行動すること — 私たちはどこへ行きたいのか

可能性と弱点とを心に留めながら、福音、本会、教会、そして時のしるしを通して聖霊が私たちに求めておられることに耳を傾け、次のように自分に問うてみましょう：

私たちはどこへ行きたいのか、そして、どのような具体的な選択をしたいと思っているのか。

1. 真の信仰と祈りの生活のために、
2. 兄弟性と小さくあることにおける交わりの生活を意味深いものにするためには、
3. 宣教と福音化のダイナミズムのために、
4. この世で預言的な証しとなるために、

注：各分野で一つ選択してください。

最終とりまとめの送付締め切り

管区長または分管区長は、行程を2－3ページにまとめて、2012年11月までに総本部事務局にお送りください。

OFM総本部事務局

各言語版は以下のサイトで入手可能

<http://www.ofm.org/ofm/?p=638&lang=en>

## 福音からの再出発

—刷新計画の手引（2010—2015）—

翻訳・発行：フランシスコ会日本管区

発行日：2010年10月25日

106-0032

東京都港区六本木 4-2-39

聖ヨゼフ修道院

03-3403-8088